

第五章 結論

本論で言う「左官装飾技芸」とは、左官装飾の基礎工事に関する細部装飾全般を指すが、明末期と清朝時代に福建と広東地域から台湾へ伝わった剪粘（せんねん）、交趾焼、泥塑（でいそ）、日本統治時代に日本から伝わった人造石塗、左官彫刻、鏝絵なども含むものとする。左官装飾技芸は台湾建築に応用され、多様な組み合わせによる台湾特有の建築を形成した。日本統治時代に大量の公共建築が建設され、この時に台湾の左官職人と剪粘職人のうち技術のある者たちが、当時日本で流行していた左官装飾技芸に学び、これを模倣する形で取り入れた。

一、本論文のまとめ

1. 左官装飾図説の絵画製作と利点

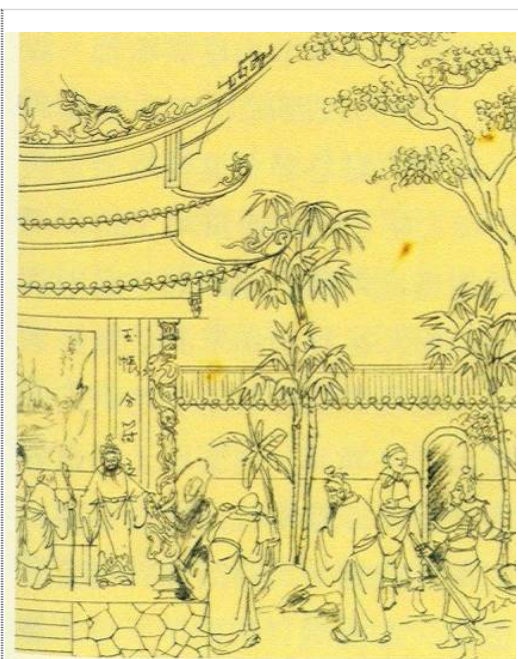
絵図の製作は、その評価額をつけるために役立つが、しかし全ての職人が作成できる能力を持っているわけではない。

図説あれば、左官装飾デザインにおけるアウトライン作成の利点は以下の通りである。

評価額をつける。業主にかかる経費、作品題材の影響、施工時の質や量の目安となり、業主への見積もりと予想評価額のリストとして提供される。

価格に対する助言と値引き交渉に役立つ。

職人が見せる技量と業主に対する信頼の獲得。業主との交渉時、絵図をもって補足説明が行えるなら、業主からの信任が更に得られやすくなる。例として王保原職人の場合は、デザインを用い補足説明、また左官装飾設計とその執行過程を行う。剪粘職人の絵図製作は、主に立面図法が使われるが、少数の職人のニーズによって、断面図や透視図も加えられる。



【図 5-1】王保原の剪粘略圖（引用黄秀蕙、「巧手天成」p92、2011年、台南市政府文化局）

左官職人の場合、まず屋根の部分を詳しく描き、そこから下方のアウトラインを描くのである。これは剪粘職人の作業部分に関係し、剪粘職人にとっての図案の重点は、各種装飾物の配置、その大小、スタイルや造型のわかりやすさ、また視覚効果になるからである。大棟（屋脊）と両側の鳥衾瓦（燕尾）の形状は、高度を必ず皆一致させ、中軸線をもって対称のバランスをとる¹。例えば、大棟の一方に龍、一方に鳳凰を設置することは不可能で、この対称的特性が伝統的な建築様式である。

¹建築中軸線をもって対称のバランスは同じ動物、水紋、花飾である。

2. 装飾部位から見る構図の原則と技巧

伝統建築職人が弟子入り制度による養成教育過程の中、木造、石造、左官装飾などの作品の表現方法に対して題材選びを或いはキャラクターの形作り等において、決まった職人伝承システムに頼っている。故に決まった構成と寸法の制限に置かれ、如何にして表現したいイメージをはっきりと表せるのは、全てが職人の構図工夫により、これもまた作品の価値を示す要点になる。各堵のデザインは武場と文場の2つに区分される。施工前に、まず堵の大きさや設置する人物等の数量を考慮し、その後、空白の部分を山や樹木で補う。角の空白に題名と落款を書き残す。

排頭、設置場所は屋根から突き出た平台の位置にある。これは、距離が遠くなると、鑑賞者からの視覚仰視角度が大きくなるため、必然的にその人物が前傾する傾斜角度も大きくなる。墀頭は屋根と壁の接合部に位置し、物語の内容は単純で、静態的な場面で構成される。

水車堵は職人により物語の最も興味深い箇所を抜き取り表現される。水車堵が長過ぎる場合、通常3分割される。堵頭を使い間隔をあげ、その比例は約1:2:1となり、各部分で違うストーリーが展開されている。壁堵の構図に関しては、まず水平方向になることを考慮し、また上下部の関係を対応させることに注意を払う、人物の配置は避け、窮屈で逼迫したようにせず、視覚焦点と視覚バランスが取れるようにすることが最も重要になる。

神棚の位置は鑑賞者の俯角または水平角にある。神棚の構図がバランスを失ってしまえば、上重下軽な圧迫感が生じやすくなるためである。



【図 5-2】封神演義題材「南天門」の水車堵構図と作品現況（筆者撮影）



【図 5-3】人物地位の違いによる主従関係を表す（筆者撮影）



【図 5-4】三層式の排頭（筆者撮影）

3. 日本統治時代の人造石塗の伝来と影響

人造石塗はセメントに細砂・石粉と水などを混ぜ合わせ、必要な形によって、色付けてから凝固させると完成となるが、石造建築の質感を模倣することが出来るため、天然石材の代用品として使用される、ゆえに人造石洗出し・人造石研ぎ²・人造石切りなどの改装技術は、全て人造石塗の工法の一つであった。人造石洗出しは当時、施工が便利で、工程費用の面でもかなり経済的であった。しかし人造石塗工事にもただ一つ欠点がある。施工数ヶ月から数年で表面に亀裂が生じるのである。



【図 5-5】日本職人から贈られた左官工具一式（筆者撮影）

1900（明治 33）年になると、日本人の台湾の伝統的都市に対する改造事業は、次第に完成していった。この時期、台湾の建築技術の面に、重要な変化が起こった。つまり、「鉄筋コンクリート」と「日本レンガ」の導入である。これにより、人造石洗出し技術も台湾にもたらされ、これらの構造体の保護、及び装飾材の役割を担うことになった。

『台湾總督府公文類纂』の「病室構造ノ仕様書」³の記載によると、最も遅くとも明治 34(1901)年の時点で、人造石洗出しは建築物の室内、及び室外の装飾に使われていた。台北市の文化財「水源地唧筒室」は、現存する建築物の中では、最も古い事例である。この後、石造を模倣する風潮が生まれた。街並みにおいて、人造石洗出し技術は外壁の装飾に用いられた。



【図 5-6】台北本町街並みの改築（引用旧絵葉書、中原大學近代建築研究室蔵）




日本統治時代初期、政府は盛んに大挙して家屋、神社等の建築を行った。その際、日本からの職人だけでなく、台湾の職人も建設に関わった。この「雇用参与」の関係により、台湾職人も訓練されることになった。その時、台湾總督府博物館の修繕に参加した郭三川氏は、竣工後、日本人左官工から、友情の記念として左官工具一式を贈られたと言い、両者の心が通じ、友情が生まれたことを示唆している。台湾の「土糊兼剪黏職人」は、台湾の伝統的な剪黏技術⁴、及び土糊の技巧を元々身に着けており、簡単な訓練をするだけで、西洋建築の技法語彙を模倣し、「土糊の人造石洗出し」の中に表現することができた。

²人造石研ぎ出しは碎石とセメントをこね合わせて塗り付け、硬化した後、砥石、グラインダーで研いで平滑にし、艶出し仕上げとしたもの。

³ 参考「病室家屋仕様圖」『台湾總督府公文類纂』明治三十四年進退追加第一卷第六門衛生-病院ノ四、1901（明治 34）年。

⁴ 「剪黏（ジェンネン）技術」とは、台湾と中国福建・広東地区特有の装飾技術。剪粘という装飾技術は、元来、中国の福建・広東地区から伝えられたもので、台湾では寺廟と家屋の装飾に使われてきた。

人造石塗は「形式と施工方法」を分類の拠り所とし、「平面の人造石洗出し」・「土糊の人造石洗出し」及び「型製造の人造石洗出し」の三種類に分けた。鏝(こて)は日本左官職人または台湾の剪粘職人、鏝絵職人にとって一番大事な道具である。灰匙仔(鏝)は左官装飾職人(剪粘職人、鏝絵職人、交趾焼職人)にとって大変重要な道具、その種類も形も様々けれども、台湾職人の間では一般に「灰匙仔」と呼ばれている。人造石塗りの材料は「種石」及び「調合材料」に分けられる。

【表 5-1】人造石洗出し形式の比較			
類型	「平面の人造石洗出し」	「土糊の人造石洗出し」	「型製造の人造石洗出し」
定義	種石とセメントの混合でモルタルを作り、建築物の表面に直接塗る。「噴霧器」を使い、モルタルを洗浄し、種石を表面に露出させる。	台湾の伝統的な「土糊と剪粘技法」を基に発展したもので、様々な形を作り、装飾し、十分に押さえ込んだものを、噴霧器を使い洗い出す。	大量に製造するため、「型製造」の技巧が使用されている。何度でも生産でき、現場で接合して完成させる。
職工別	左官職人	土糊兼剪粘職人	土糊兼剪粘職人、左官職人
主な使用工具	一般的な左官鏝	土糊兼剪粘に使用する灰匙、両頭さじ	土糊兼剪粘に使用する灰匙、両頭さじ
技術の継承	日本左官工	日本左官工、中国土糊兼剪粘職人	日本左官工
早期建築	市区改正計画の街並み	台北市水源地唧筒室(1908年)	台北市水源地唧筒室(1908年)
伝統工法と現代工法の違い	1. 噴霧器の改良 2. 平面の人造石洗出しの押しハブ化	1. 骨組みの組み立て改良 2. 伝統工法の伝承が絶え	1. 型材料の改良 2. 現代は膨張ねじを埋め込み、固定する。
図説			
備考：(筆者制表)			

4. 貼付け材料の転換から見る剪粘の変遷

「剪粘」とは、割れた茶碗の破片や色ガラスなどを再利用して必要な形に刻み、作品の表面に一つ一つ貼って作られる装飾のことである。剪粘貼付材料の転換から見る剪粘の変遷は下記の五時期となった。

茶碗と陶磁器の破片（清朝～1960年代）：清代から1960年代まで、屋根の上や壁などの剪粘装飾は、様々な色の陶器や磁器の破片（茶碗・皿・瓶・甕など）で、華麗に飾られている。

カラーガラス（1950年代～1990年代）：1950年代～1990年代、カラーガラスは剪粘貼付の主要な材料として使われていた。カラーガラスは多彩であり、且つ薄くて加工しやすく、出来上がった作品も陶磁器の破片で作るものより鮮やかに見えるなどの利点があった。カラーガラスと茶碗を比較すると、必要とされる耐久性の点では茶碗のほうがすぐれている。台湾の廟宇では剪粘の表面にガラス材質が使われており、台北龍山寺がこの方式を最も早く使用した廟宇の一つと推測される。

貼付材料としてアクリサンデー板は1980年代頃に短期間であったが出現した。剪粘作品の質感も良くないので、1990年代末以後、左官装飾の職人達があまり採用しなくなったようだ。

剪粘専用の定型陶片とは、剪粘作品に必要な形に応じてプレス加工⁵して、電気窯で焼成することにより作られる陶片だ。定型陶片及び定型陶製品が大量に生産されるようになると、制作コストは大幅に下がった。しかし、剪粘の「剪(切る)」という手順が省かれ剪粘作品は定型陶片を貼るという手順しか残らなくなってしまった。職人の創作才芸が展開できないというのが最大の欠点であった。

剪粘専用の模造茶碗と言うのは、剪粘職人が自ら剪粘のために作る茶碗の形の焼き物のことだ。剪粘専用の模造茶碗は、主に近年台湾文化財の修復上の需要に応じて出現した。そして、1950～1990年代流行したカラーガラスは段々なくなった。



【図5-7】陶磁器・茶碗・皿・瓶・甕などの破片はすべて剪粘の貼付材料(筆者撮影)



【図5-8】ガラスの武將作品(北港朝天宮、筆者撮影)



【図5-9】模造茶碗を作った仙女散花の作品(新港奉天宮、筆者撮影)

⁵ 空気圧などを利用して型に鳳凰の羽、獅子の毛などの定型陶片(素材)を強押し、所要の形状に成型する加工法。

5. 台湾交趾焼の発展と変遷

交趾焼の制作過程⁶は構図と準備、土作り、造形と装飾、陰干しと素焼き、釉薬をかけることと絵付けすること、焼成の六つの工程に分けることができる。台湾交趾焼の変遷は五時期となった。

明末清初時期：台海使槎録の記載。当時の水仙宮について、その屋根装飾の精巧さ、華麗さは、数ある寺院の中でも抜きん出ている。

清中葉時期：葉王の傑作は尾崎秀真が嘉義葉王の交趾焼と褒められた。嘉義県は台湾交趾焼の発祥地として、あの時日本人も「嘉義焼」と称する。葉王の創作、生き生きとした造形、緻密な彫刻、卓越した色使いなど、作品は絶賛されており、台湾交趾焼の独特な芸術的地位を確かなものにした。真に迫る古典的人物の繊細な造形以外に、釉薬は寶石釉が採用されている。

日本統治時代：職人の承伝系譜。大正から昭和初期にかけて、台湾の経済は中国に比べて豊かになり、寺院の改修が盛んに行われ、多くの優秀な唐山の職人が台湾に招聘されて住宅や寺院等の修築工事にあたった。日本との頻繁な貿易往来があったことから釉薬は日本から輸入されていたが、「寶石釉」がずっと使用され続けていた他は、多くの職人は水彩釉に切り替えていた。

戦後～1970年代：台湾地元職人の活躍。国民政府は台湾に場所を移した後、大陸との航路が切断された事で、大陸から再び優秀な職人を呼ぶ事はできなかった。そのため再建工事はちょうど青壮年期にあった地元台湾の第二世代の職人達に大きなチャンスをもたらした。1960時代の焼き方は「窯の構造」の改良に伴い、二つの段階に区分する事ができる。

1980年代以後：交趾焼工芸の轉型。1980年代以後、交趾焼きは建築物の応用以外に、「創作」や「工芸品収集」へと発展し、その作品題材は伝統的様式に留まらない。一つは工芸品創作(林添木の流派)、もう一つは寺院建設及び交趾焼き工房の結合(洪坤福の流派など)、二つの方向に顕著な流れが見られる。



【図 5-10】林添木の人物模型（筆者撮影）



【図 5-11】交趾焼の土作りと造形（筆者撮影）



【図 5-12】葉王の八仙、寶石釉の釉色を付いた（佳里興震興宮（筆者撮影））

⁶国立歴史博物館編輯委員會，《彩塑人間 臺灣交趾陶藝術展》，臺北：國立歴史博物館，1999年。

6. 日本統治時代「清国職人」の渡台、伝承と影響

日本統治時代とても重要な「清国職人」のは潮州派何金龍と泉州派洪坤福である。何金龍の剪粘絶技は剪粘職人たちはよく空前絶後と称美され、絵師として優れた技巧を習得した。何金龍の芸芸特色と影響は剪粘の全体的アウトラインは、京劇や演劇に似て、ドラマチックでダイナミックな躍動感が与えられる。何金龍は初めて、武将の鎧兜を創作し、連ねた槌(ハンマー)を使用した配列組合で表現をした。人物の隈取りの表情は京劇を参考にメイクを施し、背景の建築樓閣、山景花草はとても精細に作成される。優れた絵図や中国国画技術を持っていたこともある。さらに、どちらのスキルも非凡な才能を見せ、技術を同業者からも認められた。今でも、彼の右に出るものはいないと言われている。

洪坤福は、日本統治時代の当時、交通も不便であった時代に、人より優れた技術を持っていたからこそ廟宇側の絶大なる信頼を得て工事を依頼され、これほど多くの重要な廟宇の修復ができたのである。彼は好機を生かして視野を広げ、その技術を更に確実なものとしていった。

台湾に渡った職人たちのうち、泉州職人洪坤福は台湾での弟子の人数が最も多く、その組織構成も最も優れた職人集団であった⁷。弟子の五虎将⁸はその技術を受け継いだだけでなく、その廟宇建設業界への影響力は主に戦後の大規模な弟子への技術の継承にある。終戦後、五人⁹はそれぞれを筆頭に師匠団を作り、その弟子たちがまた弟子へと教を繋いでいった。同門の師匠を持つ新港師匠団と永靖師匠団等、その弟子や孫弟子が台湾各地で活躍し、最も影響力のある師匠団体となっている。



【図 5-13】何金龍の国画(筆者撮影)



【図 5-14】何金龍の剪粘(筆者撮影)



【図 5-15】洪坤福の作品(筆者撮影)

⁷弟子は梅清雲、陳天乞、張添發、陳專友、姚自來、詹懷榜劉藤江清露である。

⁸五虎将の呼び名は、三国志演義の中で劉備が漢中王となる際、指揮下の勇士五名を「五虎大将」と名づけたことに由来する。

⁹台北保安宮での技術習得から孔廟に残る「孔子問礼」の作品まで、五虎将の生涯とその足跡は、百年近くに及ぶ廟宇建築史の縮図の一つである。また、中国大陸から来て台湾に根付き、後の世に技術を伝えた職人たちは、その後の歴史に残る貢献をしたといえる。

7. 陳三火から見る現代の剪粘工芸と新創意

伝統の改変と不改変は、いつも争議される議題である。鍵となるのは変わるか変わらないかではなく、どのように変わるかということにあるようだ。陳三火が剪粘を新たな境地に導いたのは、「改変と不改変」の程よい加減によるものであった。剪粘はもともと、物資の少ない農業時代に先人たちが、物を大切にする勤労儉約の美德に基づき、日常生活の中で廃棄される割れた茶碗などの破片を回収して再利用したことから始まり、その破片の色に従って巧妙に配列し、モルタルの胚体(人形の四肢や体幹、佩件等、全て師匠の知恵とアイデアを試みる)を覆うように貼り付けたものである。しかし、現代の剪粘作品は剪粘専用茶碗やを作った。陳三火が慈濟宮で花瓶からヒントを得て創作した作品は、まさに剪粘という技術が芸術となった、元々の剪粘の発想である

陳三火の「随縁技法」は廃棄された陶磁器(花瓶や茶碗や装飾品など)を思いのままに砕き、無駄が出ないように破片は出来る限り全部貼り付ける。陳三火は剪粘で最も困難なことは剪裁であり、貼付材料の改修に至っては縁に頼るしかないと考える。

陳三火の作品は強烈で大げさとも言える動態スタイルを持ち、まるで今まさに舞台上で演技をしている劇中人物のようである。半面浮き彫りから立体彫刻までの挑戦し、更に高い鋭さを具える必要があり、材料本体の曲線に従えば、思い通りに創作できると考える。新材料の試みと禁忌の突破の決心とともに、題材が変われば、いつも慣用している図形語彙もそれに伴って変わり、技術を突破する決心が表される。簡単言えば、陳三火の剪粘芸術における超越と大胆な創新は、伝統に新たな意味を立てた最良の模範である。将来国家級(文化部)の認証と当技術の保存指定を受けるのもそう遠くないだろうと筆者は考える。



【図 5-16】姚自来 (筆者撮影)



【図 5-17】現代体操 (筆者撮影)



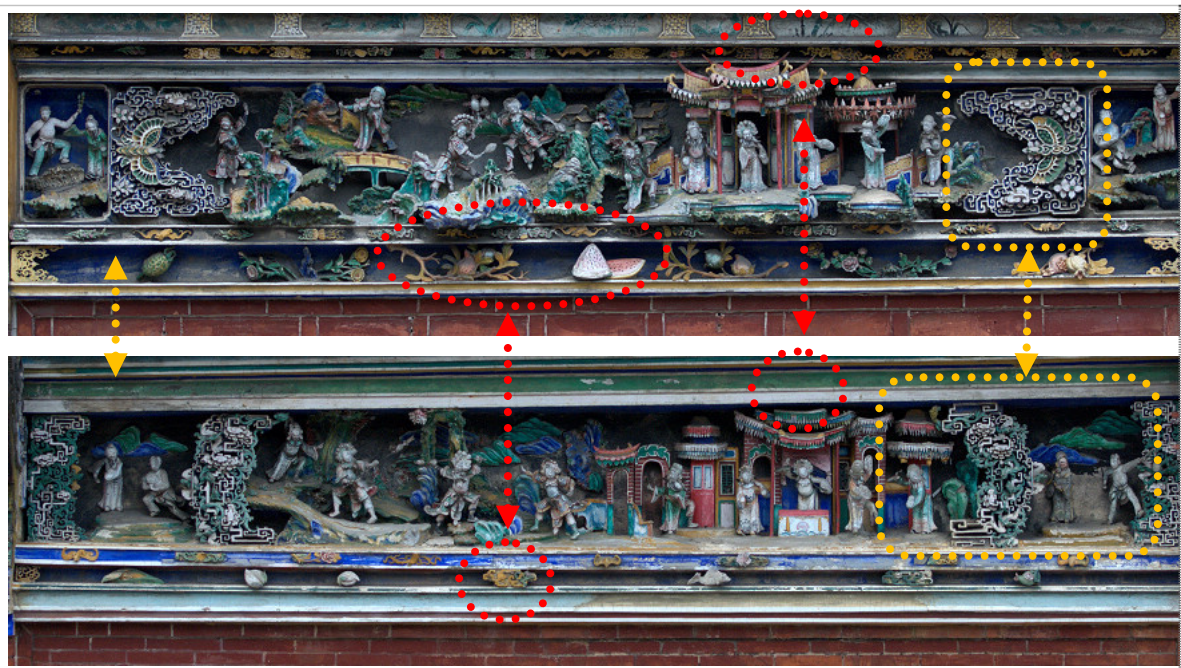
【図 5-18】陳三火作品 (筆者撮影)

8. 職人の対場競作

対場作(対場競作)とは一つの工程をそれぞれ二つ以上の職人グループ(職人の流派)が受け持ち、最終的にそれを一つの建築物として完成させる。請け負い側は、二組の職人グループ間の競争による作品の技巧向上を望んでいるが、それだけでなく、そこには空間における鑑賞価値の幅を広げ、しかも工事価格を抑える等、同時にいくつもの利点がある。どのような工程(木作・石作・左官装飾・彩絵など)であっても、この競作建築に参加する職人達に一定の実力と自信があってこそ、これらの案件を引き受ける事ができる。つまり、この競作によってさらに卓越した建築作品が生み出されるという事でもある。例えば台北保安宮、二重埔先嗇宮、嘉義城隍廟などがある。

対場競作は「競争の対場競作」と「協力の対場競作」に分ける事が出来る。概して言うとならば、対場競作のコンセプトは競争と同じで、合作競作は健全な競争的合作スタイルで、比較的相互間の競う意味合いが少なく、熟知し合った二組の師匠或はその門下にある弟子グループが、それぞれ自分たちの受け持ち部分を取り決めた後、共同でその建築工程を分担遂行する。協力(合作)の対場競作職人頭は価格の削り合い競争を避ける為、時には事前に根回しや協議を行う等、それぞれの職人達と一致団結し、合作対場競作の方式を目指し入札した。

この種の競争と協力の関係は非常に微妙で、圧力が漂いながらもそれぞれの面子がかかった競争を通して、無形の中にも両者が持つ匠の技が最大限に引き出され、建築物の鑑賞価値とその魅力は更に増していったのである。



【図 5-19】1918(大正7)年の台北保安宮、上図背景は龍の側の制作者：洪坤福・柯仁來・陳天乞・張添發、下図背景は虎の側の制作者：陳旺來。現在、1918(大正7)年残った作品は水車堵の背景と配景しかない。(筆者撮影)

9. 台湾職人伝承制度の検討と伝統工芸の保存現況

筆者の多年に渡るフィールド調査で職人を尋ね、技術工芸の維持、永続的な発展に必要な事は、簡素化された工具の使用、過重労働時間の増減、完成した作品の平凡さや芸術性等の要因のみではないことを発見した。台湾での職人の伝承制度の場合、世襲制、師弟制、研修学習制の三種が挙げられる。

世襲(家伝)制: 技能学習者(息子)は父の命を受け、家業を引き継ぐ負担があり、簡単に転換できるものではない。学習者の3年4ヶ月の学習期限が問題とはならず、独立する時期は大抵、師の父が引退した時からになる。先人からの職業経験が全般的に吸収できる反面、継承が願われなかった場合、伝承することができず、その技術は未来永劫途絶えてしまう。

師弟制度: 師弟制度の身分は親戚関係か非親戚関係2種類に分けられる。学習期限は前者の方は後者より固定せず、学習規定の満期に、弟子は師匠(師傅)に昇格し、出師(一人前の職人)となる。将来的にこの技能を自らの職業とするのかどうかは、個人の興味と経済的に成り立つかどうかで決定される。

研修学習制: 学習年に規制、制限はなく、自由な学習者に属する。この形式の特徴としては、学習者はそれぞれの専門技能を有しており、学習者の年齢の差が非常に大きいことである。

ここ40年来、台湾の経済は飛躍した。社会の変動に直面し、産業方式も変革している現在、最も衝撃を受けているのは世襲制が、師弟制でも類似した問題が見られる。世襲制や師弟制度など、この件に関しての是非を問うのではないが、伝統的職人の生活必需の事と貴重なこの文化資産(技能)の運用方法を考慮しなければならない。それには公的機関の介入や支援保護、伝承制への再検討、社会風潮や対策に対する建議が必要となるだろう。

1982年に台湾文化資産保存法が公布されて以来、政府は伝統芸術を保存することを続けている。過去において流失した伝統芸術を救う為、多額の資金を投入して、きたがより多くの伝統芸術の伝授計画を行うのには限りがあり、伝統芸術の人材が途切れることに関しては、あまり効果が見られなかった。そこで、2005年に公布された台湾文化資産保存法は、特に新たな「技術保存者¹⁰」を増やすこととしている。無形文化資産の保存は具体的に見える有形の「物」を対象とすることではなく、一連の技術保存者の認定制定と支援措置を行う。

台湾教育部は固有民族芸術文化の保存、維持及び発揚の為、1985年に公布された「民族芸術薪傳獎」を十回開催し、合計132人、42団体が賞を受賞した。1989年から13名の重要な民族芸術家が選抜された。しかし、左官装飾技芸で受賞した者は二人しかおらず、この比率が低過ぎるために、成果はあまりよいとは言えない。

台湾文化資産保存法下での伝統工芸は、基本的に消極的な保存維持政策であるといえる。伝統工芸保存から伝統工芸の創作に至るまで、積極的な戦略は現代社会での環境の脈動を調べ、伝統工芸家に創作活動を奨励することとなる。言い換えれば、固有文化保存政策から転化し、国家が芸術創作の奨励を行う機能の政策にするのである。

¹⁰ 「技術保存者」とは文化資産保存と修復することが不可欠なことであるとし、その上で必要な技術を保護しなければならないとする。

二、本論文の研究成果、限界と今後の保存修復に向けた提案

本研究で主に扱ったのは、「技芸（美術工芸にかかる技術）」であるが、適宜「職人（職別と伝承）」と「材料（作品）」を加えて比較検証することによって、台湾左官装飾技芸やその材料の転変に関する歴史的展開の過程が明らかになる。本論文の研究成果において、下文では職人、技芸、材料、文化財保存に分けて論述する。

まず、職人の視点から台湾左官装飾職人の変遷をみる。台湾は移民社会に属しており、各民族は中国での故郷の風俗、習慣を移入した。住居建設においても、故郷の職人（匠）を台湾に招聘し、故郷での建築に似せるように計画とレイアウトを行っていき、台湾での多元建築の風格が形成されていったのである。日本統治時代大正から昭和初期にかけて、台湾の経済は中国に比べて豊かになり、寺院家屋の改修が盛んに行われ、多くの優秀な中国（唐山）職人が台湾に招聘されて住宅や寺院等の修築工事にあたった。中国から招聘された職人も台湾地元の職人も共に優れた技能を發揮し、この時期に多くの優秀な人材が輩出された¹¹。



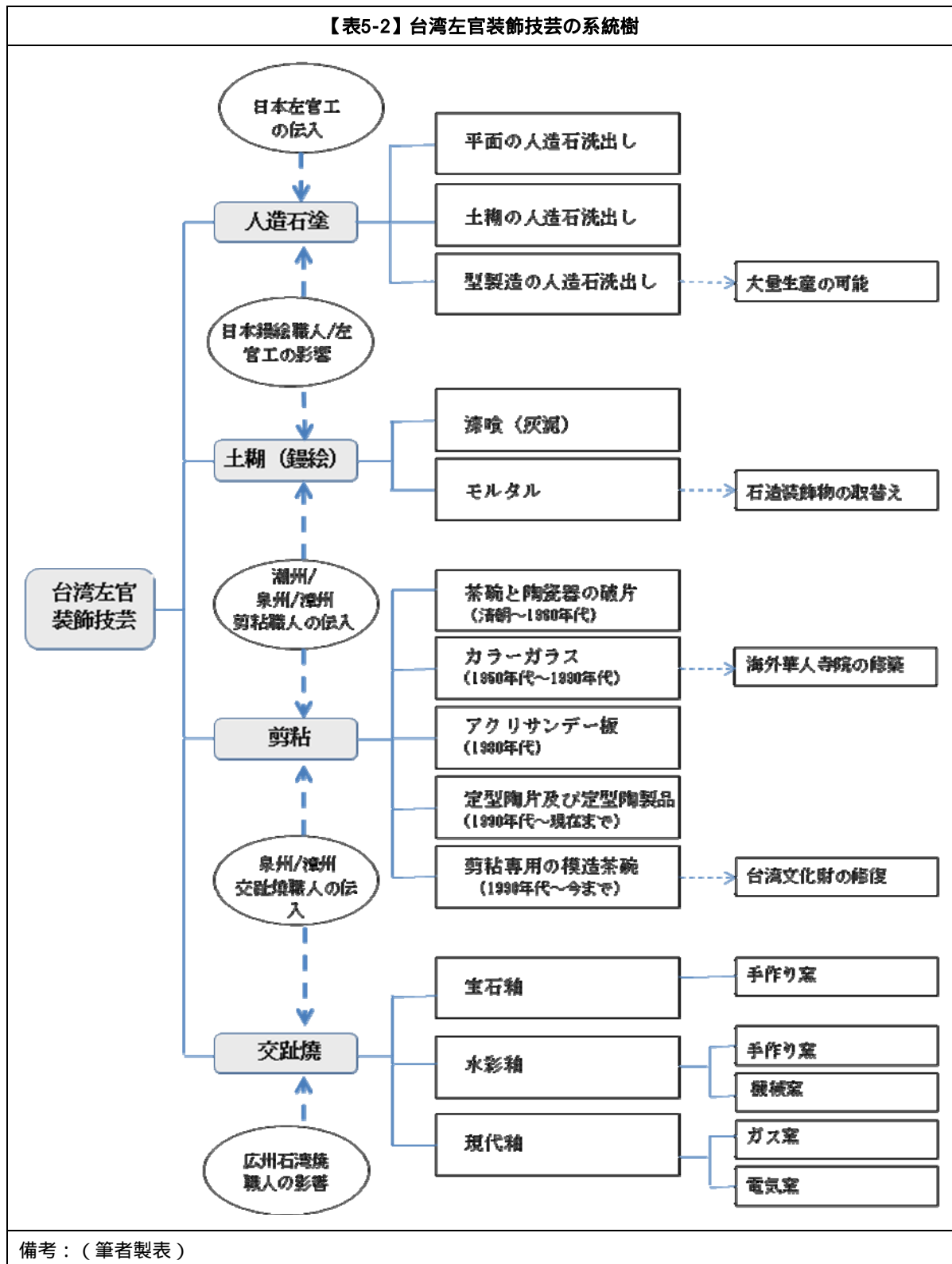
【図 5-20】2005 年 1 月、95 才の左官装飾職人姚自来（筆者撮影）

日本統治時代初期、政府は大挙して家屋、神社等の建築を行った。その際、日本からの建築職人だけでなく、台湾本土の職人も建設に関わった。この「雇用参与」の関係により、台湾本土の職人は間接的に訓練されることになった。建築の過程で、台湾の左官職人達が衝撃を受けたのは、建築用語と様式上の差異よりも、日本の新技術（人造石技術など）と伝統技芸（漆喰、鍍絵など）に対してであった。こうして、日本人職人との間に技術伝承のルートが開かれ、民間の工程において、輝かしい発展を続けた。

1949 年に中華民国の国民政府は台湾に場所を移した後、中国大陸との航路が切断された事で、中国大陸から再び優秀な職人を呼ぶ事はできなかった。そのため再建工事はちょうど青壮年期にあった台湾の職人達に大きなチャンスをもたらした。1996 年に中国で発生した文化大革命により、中国人は海外に交流赴任することや、また仕事面でも共に厳しい制限を受けた。アジアの華人区の中国式建築で修復工事を行う際、中国からの職人（匠）を招聘しにくくなった為、台湾の職人に転向して招聘し、海外の寺院を修築することになった。その為、台湾本土の職人達は海外において素晴らしい才能を現す機会が与えられることとなった。例えば 1960 年他に弟子を引き連れて来た朱朝鳳は、日本の那智山奥の院を建築し、弟子を引き連れて来た陳天乞は、日本長崎の孔子廟院を建築した。台湾の職人は海外で寺院楼閣を築き、多くの工芸の佳作品が残っている、その事が潜在的に台湾での寺院を建てる技術の普及と交流を広めることになったのである。

¹¹中国から招聘された建築職人も台湾の職人も共に優れた技能を發揮し、この時期に多くの優秀な人材が輩出された。例えば潮汕何金龍の流派、泉州洪坤福、柯仁來の流派、泉州蘇萍、蘇宗覃、蘇陽水の流派、泉州廖伍の流派、泉州蔡文董の流派、本土職人の大稻埕陳大廷の流派、台南洪華の流派、台南周老全の流派等がある。

左官装飾技芸は台湾建築に応用され、多様な組み合わせによる台湾特有の建築を形成した。台湾左官装飾技芸の系統樹は【表5-2】の通りである。異なる種類の左官装飾技芸は、異なる分類に属する職人が生み出したものであり、その関連技術に影響を与えた。



技芸と材料の観点から言えば、本研究で明らかにしたことは以下の通りである。

台湾左官装飾の技芸と材料を解明した。本研究は、今後、台湾の伝統建築研究はもとより、寺院や文化財の保存修復の際に、左官装飾作品の材料や年代や特徴などを判別する上で貢献するものとする。

左官装飾は「形式と作法」から「土糊（鏝絵/泥塑）、人造石塗、剪粘、交趾焼」¹²の四類型に分類することが出来る。

台湾伝統的な左官装飾工具（剪粘、交趾焼、人造石塗などの道具）と左官装飾工程図説を発掘した。年老いた職人の慣用道具と左官装飾工程図説の収集の急迫。例えば、日本統治時代剪粘職人陳三川が日本工官工から工官工具一式を貰った。

現代左官装飾技芸の創新と新材料の試み。陳三火の例をとって、陳三火の剪粘芸術における超越と大胆な創新は、伝統に新たな意味を立てた最良の模範である。麻豆鎮文化館での初個人展では、民衆と芸術文化関係者の視野を広げて剪粘を再認識させ、次第に芸術界を驚かせるようになり、伝統建築職人から現代芸術家へと転身する。

台湾寺院の重要な左官装飾作品の発見と記録を行った。例えば、新竹新埔廣和宮の交趾焼、嘉義東石港口宮の剪粘と交趾焼、両者とも文化資産保存の価値である。

台湾の気候は多雨多湿で台風の襲来も年に数回あり、屋根上の剪粘と鏝絵は時間と共に劣化して原型を失い、元通りに修復するのは非常に困難である。それで、台湾廟宇の修繕工事の際、多くの建材や文物が、故意にしろそうでないにしろ行き過ぎた修繕をされるか不当に取引され売却されている。筆者の多年に渡るフィールド調査で作品を尋ね、重要作品の保存や道具の収集など、緊急の修復に向けた提案は下記の通りである。

重要職人作品を迅速に調査し管制や保管を行う必要がある。

屋根上の剪粘と鏝絵作品の画像記録を作成する必要がある。

年老いた職人の慣用道具と左官装飾工程図説が収集の急迫した課題である。

研究限界において、現在、高齢となった職人達の技芸を継承する者は絶え、多くの優れた作品も廟宇の改築によってほとんどが破壊されたために、完全な形で50年以上保存されているもの（特に剪粘又は鏝絵）は稀な例となっている。左官装飾作品と伝統左官装飾技芸の消失は我々の考えているよりもずっと速く進行してある。そうした場合には、このケース・スタディの限界性をできる限り記録調査すべく。

以上より、本論文は、台湾文化財における左官装飾の修復工事に関する基礎研究を確立した。この研究成果の積み重ねが、今後の技芸保存や文化財修復の基礎資料となることを切に願っている¹³。

¹² つまり台湾左官装飾技芸の発展と変遷には、人造石塗、鏝絵、剪粘、交趾焼の四者が密接に関係している。

¹³ 本論文は、台湾の寺院、古民家、歴史的建造物及び文化財の保存修復工事に関する修復技術や歴史考証、保存理論など、実際の修復に有効な参考資料となることが期待できる。

参考資料と文献史料

- 松本甚三、『建築材料集覧』、東京：太陽堂書店、1928(昭和3)年。
- 山田幸一、『左官工事 材料と施工法』(改訂増補版)、株式会社工業調査会発行、1971(昭和46)年。
- 佐藤嘉一郎 佐藤ひろゆき、『土壁・左官の仕事と技術』、学芸出版社(京都)、2001年1月。
- 永坂淺治郎、「擬石塗施工に就ての所感」『台湾建築会誌』第一輯第五號、台湾建築学会発行、1929(昭和4)年。
- 池上清得、『台湾寫真大觀』、台北市：台湾教育資料研究会、1936年。
- 犬塚書店、『ALBUM FORMOSAN』、新竹：犬塚書店発行、1927年。
- 台湾新民報社編、『台湾人士鑑』、台北：台湾新民報社、昭和12年9月。
- 尾崎秀真、清朝時代の台湾文化《台湾文化史説》。台南州共榮会台南支会編、昭和10年合本改版発行、p255-276。
- 尾辻国吉、「台湾建築界の回顧」『台湾建築会誌』第十五輯第四號、台湾建築学会。1943(昭和18)年、pp.133-136
- 安江正直、台湾建築史(二)《建築雜誌》266号、1909年、p38-76。
- 藤島亥治郎《台湾の建築》、彰国社発行、1948年。
- 田中大作、台湾島の建築に関する研究《台湾島建築之研究》、1950(昭和25)年、台北：台北科技大学出版、2005年。
- 宮本延人、『日本統治時代台湾における寺廟整理問題』、奈良：天理教道友社、1988年。
- 蔡錦堂、『日本帝国主義下台湾の宗教政策』、同成社、1994年。
- 柳宗悦、『工芸』、東京：株式会社創元社、1941年8月(昭和16年)発行。
- 村松貞次郎、伝統技術の保存と再生--幾つかの視点《建築雜誌》昭和42年1月号、昭和42年。
- 江口敏彦、山口広監修、『洋風木造建築 明治の様式と鑑賞』、東京：理工学社、1996年。
- 千千岩助太郎、台湾の寺廟建築《台湾建築会誌》、15巻5、6期、頁179、1943年11-12月。
- 井手薫、總督府舊廳舎の保存について《台湾時報》12月號、台湾：台北、1930年。
- 日本建築学会《近代日本建築学發達史》、文生書院、日本：東京、2001年。
- 村松貞次郎、『日本近代建築技術史』、彰国社、日本：東京、1976年。
- 黃士娟、『台湾近現代の建築保存に関する研究』、東京大学工学系研究科建築専攻課程博士論文、日本：東京、2005年。
- 藤森照信、『日本の近代建築(上)』、岩波書店、日本：東京、1993年。
- 藤森照信、『日本の近代建築(下)』、岩波書店、日本：東京、1993年。
- 井出季和太/編、『台湾省台湾治績志(二)』、台湾北：成文出版社、1985年3月。
- 張英裕、「台湾における寺廟裝飾剪粘に関する研究」、千葉大学大学院自然科学研究科修士論文、2002年。
- 余文儀主修、『續修台湾府志』、乾隆三十九年(1774)原刊、台湾省文献委員會編、據民国五十一年(1962)

台湾銀行台湾文献叢刊重勘(南投市:台湾省文献委員会、1993)、卷19、雜記・寺廟・彰化県、頁650。

六十七、范成纂輯、《重修台湾府志》二十五卷;乾隆十二年(1747)原刊、台湾省文献委員会編、據1961。

台湾銀行台湾文献叢刊重勘(南投市:台湾省文献委員会、1993)、卷7、典禮・祠祀、頁266。

黃俊銘、日據時期台湾建築史三書《第九屆建築研究成果發表會論文集》、中華民國建築学会、1996年、頁237-240。

林洸沂、《交趾陶--林洸沂作品欣賞與研究》、台北:橘子出版、1996年3月。

漢光建築師事務所、《第三級古蹟彰化県南瑤宮調查研究暨修護計劃報告書》、彰化県:彰化県政府、2002年。

中国上海人民美術出版社、《石湾窯》、美乃美株式会社、1982年6月。

張維持、広東石湾陶器広東旅遊出版社発行、1991年8月、p65-66。

陳其南/王尊賢、《消失的博物館記憶》、香港商雅凱電腦語音有限公司、2010年。

黃叔瓚、《台海史槎錄》台湾歴史文献叢刊、台湾省文献委員会出版、1999年、pp.44-55。

陳文達纂、《台湾県志》台湾歴史資料叢刊第一三種、台北市:台湾銀行研究室出版、1961年。

張李德和、《嘉義交趾陶》、1953年。

李宏堅「台湾日據時期鋼筋混凝土建築技術與樣式發展間之關係探討」、中原大学修士論文、1994年。

林会承計畫主持、《歴史建築資料庫分類架構暨網際網路建置第一期委託研究計畫成果報告書》、台湾北:文化建設委員会、2005年。

洪文雄研究主持、《台湾閩地區伝統工匠之調産研究(第一期)》、台中:東海大学建築研究中心、1993年。

国立歴史博物館編輯委員会、《彩塑人間 台湾交趾陶芸術展》、台湾北:国立歴史博物館、1999年。

国立歴史博物館編輯委員会、《台湾交趾陶裝飾芸術》、台湾北:国立歴史博物館、2001年。

鄭春鐘、《彰化永靖剪黏司傅群之研究》;桃園:中原大学建築研究所碩士論文、2000年。

張淑卿《剪黏司傅何金竜研究 - 在台湾期間之事蹟及作品》台北芸術学院伝統芸術研究所碩士論文、2001年。

張淑卿、何金竜の剪花研究以屋脊剪花為例《民間芸術綜合論壇論文集》、国立伝統芸術中心、2003。

吳梅瑛、《大稻埕陳・郭家族及其技芸之研究》、台湾台北:国立芸術学院伝統芸術研究所碩士論文、2001年。

劉玲慧、《嘉義新港剪粘業的發展以司傅傳承與工法為主》、台湾台北:国立芸術大学伝統芸術研究所碩士論文、2004年。

侯皓之、《安平伝統剪黏芸術流派及其作品研究》、成功大学芸術研究所碩士論文、1999年。

蔡榮順、《台湾伝統工芸 - 交趾陶與剪黏之源流及發展》、嘉義市文化局、財團法人金竜文教基金会、2006年。

康諾錫、《台湾古建築裝飾圖鑑》、台北:貓頭鷹出版、2007年。

范雅婷、《交趾陶匠師陳天乞之研究》台湾台北:台湾芸術大学造形芸術研究所古蹟芸術修護組碩士論文、

2008年。

簡榮聰、鄭昭儀、《彩塑風華 - 台湾交趾陶藝術專輯》、南投：台湾省文献委員會、2001年。

褚如君、《姚自來於交趾陶藝術的發展研究(1911-2007)》、台湾芸術大学造形芸術研究所伝統工芸類碩士論文、2007年。

陳秀珠、《台湾交趾陶導覽手冊》、台北：台北県立鶯歌陶瓷博物館、2002年。

曾淑婷、《交趾陶匠師朱朝鳳技芸研究》、台湾台北：国立台湾芸術大学造形芸術研究所碩士論文、2009年。

江韶瑩、葉王交趾陶の芸術特色 《慶祝震旦文教基金会贈還葉王交趾陶暨慈濟宮建築裝飾芸術研討会》、学甲：財團法人学甲慈濟宮、2004年。

周婉窈、從比較的觀點看台湾湾與韓国的皇民化運動 1937-1945年 《台湾史論文精選》。玉山社、1996。

劉良佑、我国南方的交趾陶瓷 《故宮文物月刊》第65期、国立故宮博物院、頁58-69、1988年8月。

謝東哲、彩塑民間情-台湾交趾陶 《美育》、第111卷、国立台湾芸術教育館、頁11-20、1999年9月。

李乾朗、《台湾古建築圖解事典》、台湾北遠流出版社、2003年。

李乾朗、1920年代台湾寺廟與民居の交趾陶裝飾芸術 《藝術家》第58卷4期、2004年、頁316-319。

李乾朗、《台湾伝統建築匠芸五輯》、台湾台北：燕樓古建築出版社、2002年。

李乾朗、《伝統營造匠師派別之調産研究》、台湾台北：李乾朗古建築研究室、1988年。

李乾朗、清末民初台湾湾の泉派交趾陶初探、《彩塑人間 台湾交趾陶藝術展》、国立歴史博物館、1999年。

李乾朗、《北港朝天宮建築與裝飾芸術》、財團法人北港朝天宮、1996年。

葉俊麟、《剪黏芸術師姚自來作品與技芸之調査研究》、台北：財團法人国家文化芸術基金会助成、2005年。

葉俊麟、泉州名將洪坤福暨派下弟弟子の交趾陶作品與技芸之研究 《交趾陶學術研討会論文集》、台湾北市孔廟管理委員會、2005年。

葉俊麟、伝統堆花技芸之研究 《古蹟、歴史建築保存與在利用學術研討会(六)》、中華民國文化資産維護学会、2003年。

葉俊麟、薛琴、剪黏芸術在古蹟修復上の變遷、破壊與保存困境 《古蹟、歴史建築保存、再利用暨古蹟保存科学學術研討会(七)》、中国科技大学、2004年。

葉俊麟、台湾近代廟宇芸術「五虎將」の技芸、伝承・貢獻與作品保存之研究 《2010 東亞建築與都市保存國際研討会》、台湾建築史学会、2010年9月、頁137-161。

黃俊銘、日據時期台湾建築史三書 《第九屆建築研究成果發表会論文集》 中華民國建築学会、頁237-240、1996年。

林洸沂、《交趾陶--林洸沂作品欣賞與研究》、台北：橘子出版、1996年3月。

中国上海人民美術出版社、《石湾窯》、美乃美株式会社、1982年6月。

張維持、《広東石湾陶器》、広東旅遊出版社發行、1991年8月。

陳其南/王尊賢、《消失的博物館記憶》、香港商雅凱電腦語音有限公司、2010年。

黃叔瓚、《台海史槎錄》台湾歴史文献叢刊、台湾省文献委員會出版、1999年、pp.44-55。

- 陳文達纂、《台湾県志》台湾文献史料叢刊第一 三種、台北市：台湾銀行研究室出版、1961年。
- 張李德和、《嘉義交趾陶》、1953年。
- 陳秀珠、《台湾交趾陶導覽手冊》、台北：台北県立鶯歌陶瓷博物館、2002年。
- 江韶瑩、葉王交趾陶の芸術特色 《慶祝震旦文教基金会贈還葉王交趾陶暨慈濟宮建築裝飾芸術研討会》、学甲：財團法人学甲慈濟宮、2004年。
- 周婉窈、從比較的觀點看台湾與韓國的皇民化運動 1937-1945年 《台湾史論文精選》。玉山社。1996。
- 張淑卿、何金竜の剪花研究以屋脊剪花為例 《民間芸術綜合論壇論文集》、国立伝統芸術中心、2003。
- 劉良佑、我国南方的交趾陶瓷 《故宫文物月刊》第65期、国立故宫博物院、頁58-69、1988年8月。
- 謝東哲、彩塑民間情-台湾交趾陶 《美育》、第111卷、国立台湾芸術教育館、頁11-20、1999年9月。
- 簡榮聰、鄭昭儀、《彩塑風華 - 台湾交趾陶芸術專輯》、南投：台湾省文献委員会、2001年。
- 国立歴史博物館編輯委員会、《彩塑人間 台湾湾交趾陶芸術展》、台湾台北：国立歴史博物館、1999年。
- 国立歴史博物館編輯委員会、《台湾湾交趾陶裝飾芸術》、台湾台北：国立歴史博物館、2001年。
- 施翠峰、重新認識台湾湾交趾陶 《以手築夢-台湾湾交趾陶芸術》。国立歴史博物館、2000年。
- 施翠峰、《台湾民間芸術》、台湾台中：台湾省政府新聞處発行、1977年6月。
- 林金盛、在台湾成長發展的交趾陶、《民族芸術芸術師林再興交趾陶芸術伝承展專輯》、台湾台北：財團法人台湾手工業推広中心、1998年10月。
- 林金盛編著、《台湾交趾陶伝習要點》、台湾台北：台湾交趾芸術文教基金会、2004年。
- 傅曉敏、《台湾早期特出的陶塑芸術 交趾燒》、中国文化学院芸術研究所碩士論文、1979年7月。
- 柯基良発行、《天工四芸 台湾手路奪天工》、宜蘭：国立伝統芸術中心、2002年3月。
- 柯基良発行、《名師手路 台湾手路奪天工》、宜蘭：国立伝統芸術中心、2002年3月。劉聖秋、《70年代台湾郷土美術之研究》、屏東師範学院視覚芸術教育研究所碩士論文、2002年7月。
- 藍芳蘭、《從廟頂走来的匠師 林再興交趾陶芸術研究》 彰化師範大学芸術教育研究所碩士論文、2000年。
- 葉乃齊、1989、《古蹟保存論述之形成 光復後台湾古蹟保存運動》、台湾大学碩士論文。
- 曾淑婷、《交趾陶匠師朱朝鳳技芸研究》 台湾台北：国立台湾芸術大学造形芸術研究所碩士論文、2009年。
- 范雅婷、《交趾陶匠師陳天乞之研究》、台湾台北：台湾芸術大学造形芸術研究所碩士論文、2008年。
- 侯皓之、《安平伝統剪花芸術流派及其作品研究》、成功大学芸術研究所、1999年。
- 嘉義市政府編印、《嘉義市志》、卷九：芸術文化志、嘉義市政府出版、2002年12月。
- 賴子清、張李德和纂修、《嘉義県志(五)》、卷六：学芸志、嘉義県文献委員会編印、成文出版社、1975年6月。
- 張文英発行、《中華民國民族芸術薪伝獎 林添木師生交趾陶芸術展》、嘉義：嘉義市立文化中心、1994年2月。
- 張文英発行、《嘉義交趾節成果專輯》、嘉義：嘉義市立文化中心、1997年6月。
- 陳信雄、《陶瓷台湾》、台湾台中：晨星出版、2003年8月。
- 曾永義、《說民芸》、台湾台北：幼獅文化出版、1987年6月。

- 蔡榮順編、《嘉義交趾陶芸術初論》、嘉義：財團法人金龍文教基金会、1997年7月。
- 林俊成、台湾文化産業の先驅 顏水竜、《台湾工藝先驅 顏水竜先生百才紀念工藝特展》、南投：国立台湾工藝研究所、2003年6月。
- 行政院文化建設委員會《文化資產維護研討會專輯》、台湾台北：行政院文化建設委員會、1989年4月。
- 台湾大学人類学系、《中国民間傳統技芸與芸能調産研究第三年報告書》、教育部社会教育司委託台湾大学人類学系研究、1983年12月。
- 陳清香、葉王交趾陶在台湾美術史上的地位-兼論回歸慈濟宮的葉王遺品 《典藏古美術》第138期、2004年3月、頁72-80。
- 林明德/財團法人中華民俗芸術基金会主編、《台湾灣工藝之美 民族工藝大展圖錄》、台湾台北：行政院文化建設委員會、1997年1月。
- 施慧美、略談台湾灣寺廟芸術、《1901-2000台湾文化百年論文集II》、台北：国立歴史博物館、1999年12月、頁410-450。
- 徐文琴 台湾陶芸探源：清及日據時期台湾陶瓷發展探討、《芸術貴族》第46期、1993年10月、頁34-43。
- 陳立儀、交趾陶發揚本土文化特色傳統中求創新、《礼品世界》雜誌、第9卷、1997年9月、頁60-75。
- 陳国寧主編、交趾陶芸演講座談會、《華岡博物館館刊》第7期、台湾台北：華岡博物館、1985年7月、頁38-40。
- 陳新上、台湾交趾陶製作技術發展之調産研究、《慶祝震旦文教基金会贈還葉王交趾陶暨慈濟宮建築裝飾芸術研討會》、2004年2月、頁1-33。
- 江美玲、南台湾傳統廟宇屋脊之美：兼論葉王的交趾陶芸術、《樹德學報》、第24期、1999年8月、頁179-199。
- 江韶瑩、台湾工藝的發展與變遷(下)、《台湾美術》季刊、第4卷4期、台中：国立台湾美術館、1992年4月、頁85-90。
- 江韶瑩、《国立傳統芸術中心籌備處委託研究傳統工藝技術分級暨證照制度研究報告書》、2000年12月。
- 江韶瑩、兩岸傳統工藝交流的台湾經驗、《87年傳統芸術研討會論文集》、台湾台北：国立傳統芸術中心籌備處、1998年6月、頁487-509。
- 江韶瑩、台湾灣工藝的發展與變遷(上)、《台湾美術》季刊、第4卷2期、台中：国立台湾美術館、1991年10月、頁22-43。
- 江韶瑩、台湾工藝的發展與變遷(中)、《台湾美術》季刊、第4卷3期、台中：国立台湾美術館、1992年1月、頁56-60。
- 莊伯和、民俗芸術與文化創意産業、《傳統芸術》、第27期、宜蘭：国立傳統芸術中心、2003年2月、頁34-38。
- 劉良佑、我国南方的交趾陶瓷、《故宮文物月刊》、第65期、台北：国立故宮博物院、1988年8月、頁58-69。
- 盧泰康、台湾傳統陶塑芸術：交趾陶源流及其特色 《陶芸》、第24卷、1999年7月、頁50-54。

賴彰能、名聞遐邇的嘉義燒交趾陶始祖葉王考、《嘉義市文獻》、第 15 期、嘉義：嘉義市政府、1999 年 11 月、頁 58-134。

春雨、吉祥納福、嘉義交趾陶館、《台灣博物》、第 21 卷 2 期、台北：國立台灣博物館、2002 年 6 月、頁 38-41。

林保堯、七十年代：台灣美術發展的關鍵時刻、《藝術家》、第 59 卷 3 期、台北：藝術家雜誌社、2004 年 3 月、頁 186-191。

吳国安、說「交趾」、《華岡博物館館刊》、第 7 期、台灣台北：華岡博物館、1985 年 7 月、頁 48-50。

杜潔祥、台灣交趾陶的源流、《華岡博物館館刊》第 7 期、台灣台北：華岡博物館、1985 年 7 月、頁 41-47。

服部武彥著/蕭讚春、蕭富隆合譯、台灣的陶業、《台灣文獻》、第 43 卷 1 期、南投：台灣省文獻委員會、1992 年 3 月、頁 9-16。

邱奕松、交趾陶研究、《台灣史研究暨史料發掘研討會論文集》、高雄市：中華民國台灣史蹟研究中心、1987 年、頁 11-24。

成蒼仁、探討台灣陶瓷史與經濟發展關係、《1901-2000 台灣文化百年論文集 II》、台北：國立歷史博物館、1999 年 12 月、頁 456-492。

